

巻頭エッセイ

「君の名は。」から思うこと



西尾保之
国土交通省港湾局
技術監理室長

映画を観るのは数年ぶり、アニメ映画となると「千と千尋の神隠し」以来という本当に久方ぶりでしたが、巷で話題になっているということで、新海誠監督の長編アニメ映画「君の名は。」を観ました。

東京に暮らす少年の瀧と飛騨の山奥に暮らす少女の三葉が時空を超えて入れ替わり、・・・（後をご覧ください）というストーリーでしたが、この映画を観て、ふと6年前の東日本大震災のことを思い出しました。

東日本大震災当時、私は福島県にある小名浜港湾事務所の所長をしていました。整備を行っていた小名浜港と相馬港は地震と津波により、壊滅的な被害を受け、その光景を初めて目にした時は、これまでに無い無力感と絶望感に苛まれました。

事務所のミッションは刻々と変わっていくのですが、最初のミッションは、早急に緊急物資を受け入れられるよう港湾施設を復旧させることでした。このため、岸壁の調査・応急復旧、航路・泊地の啓開作業を港湾管理者と協働で行いました。当時、小名浜港では、マルチビームソナーが手配できなかったため、海上保安部とも協議を行い、作業船に装備されているシングルビームの音探を利用して、航路・泊地の障害物の有無を確認することにしました。

3月14日、3隻の作業船（国1隻、民間2隻）が数十メートルピッチで並んで航行しながら測深作業を開始しました。

順調に8割程度まで測深作業が進んだその時、津波発生の情報（誤情報）、更にはほぼ同時刻に福島第一原発3号機の水素爆発が発生したのです。直ちに作業の中止を指示し、職員や民間の作業員を引き上げさせたのですが、不安定な現場での啓開作業をこれ以上続けることは困難な状況でした。応援に来ていた1隻の国の港湾業務艇は次の任務のため、小名浜

港を出発する必要があり対応は不可。残り2割の啓開作業をなんとか本日中に完了させ、一刻も早く緊急物資を受け入れられないだろうか。

そうした中、千葉港湾事務所の港湾業務艇「あいりす」が小名浜港に到着したのです。足の速い「あいりす」であれば、日の入りまでに1隻で啓開作業を完了できる。当時は放射線測定器もありませんでしたので、作業再開の判断が難しい状況でしたが、関東地方整備局のTEC-FORCEは「やります」と言って下さり、その日のうちに残り2割の水域の啓開作業を完了させ、緊急物資を受け入れる体制が整ったのです。その時の関東地方整備局の勇断は、生涯忘れることはありません。

震災時には、初期の段階から本格的な復旧・復興まで、様々な場面で多くの作業船が活躍しました。災害時に作業船は無くてはならない存在なのです。作業船に携わる者として、日頃からこうした意識を忘れず、様々な状況下でも対応できるよう準備しておくことが重要です。

「君の名は。」に戻ります。彗星が落下し、村は全滅。三葉も一度は亡くなっていましたが、時空を超えた瀧たちの勇気ある行動によって村の人たちは奇跡的に難を逃れ、三葉も現在を生きていた。そして二人は同じ時代でようやく巡り合った、というところで映画は幕を閉じます。

東日本大震災を経験した人の中には、この映画のように、瀧のような人が6年前の震災当日に現れて、今の現実を変えてくれないだろうか、と思っている人がいるかもしれません。多くの人々が潜在的に持っていた願望を表現してくれた、この映画が支持される理由はそうしたところにあるのかもしれない。